

エックハルトの「神秘主義」と説教・靈的指導の言語

桑 原 直 己

【1】 はじめに

トマス・アクィナスに約半世紀ほど遅れて登場するドミニコ会士エックハルトは一般には「ドイツ神秘主義」の代表的人物として知られているが、近年の研究では彼のスコラ哲学者ないしは神学者としての側面が注目されてきている。研究者たちが描くエックハルト像も「神秘主義者」としての側面を強調する傾向と「哲学者」「神学者」としての側面を強調する傾向とに大別することができる。この二つの方向はエックハルトを理解するにあたって、彼のドイツ語著作、ラテン語著作のいずれに重点を置くかによるものと言える。この小論ではまずこれら二つの著作群のそれぞれの背景をなすスコラ学のおよび説教・靈的指導にかかわる言語世界の意義について検討する。その上で、エックハルト独自の思想の基盤をやはり「説教」ないしは「靈的指導」という文脈の中に求めることとしたい。特に、エックハルトが「異端」とされたという事実に注目し、彼が置かれた社会史的背景を明らかにするとともに、異端とされた一部の命題をエックハルト自身の「説教」「靈的指導」の文脈に位置づけた上で検討を試みる。なお、本稿は香田芳樹氏による包括的な近著^{*1}に多くを負っていることをお断りしておく。

【2】 エックハルトの生涯と著作

先述のとおり、エックハルトの著作にはドイツ語によるものとラテン語によるものがあるが、まず彼の生涯についてごく簡単に概観した上で、ラテン語、ドイツ語それぞれの主要著作を彼の生活史の中に位置づけてみることにしたい。

エックハルトの正確な生年は不詳であるが、1260年頃、ドイツのエルフルト近郊の小村タムバハで生まれた。若くしてドミニコ会に入会し、1277年以降パリで、さらに1280年頃からはケルンのドミニコ会国際大神学院で学んだ。ケルンでは最晩年のアルベルトゥス・マグヌス(1200頃-80)の教えを受けた可能性があると言われている。

1293-94年、パリ大学で神学士(講師)としてペトルス・ロンバルドゥスの『命題論集』を講義する。この最初期に属するラテン語著作として『命題論集のためのコラチオ』(*Collatio in Libros Sententiarum*)、『1294年パリで行われた復活祭説教』がある。

94年頃にはエルフルトに呼び戻され、98年までの間ドミニコ会エルフルト修道院長ならびにテューリンゲン管区長代理を務める。このエルフルト修道院長時代、『教導講話』

*1 香田芳樹『マイスター・エックハルト 生涯と著作』創文社、2011年。

(*Die rede der unterscheidung*)と称するドイツ語の著作を著している。この著作は、若いドミニコ会修道士たちに対して院長として与えた霊的指導のための講話である。

1302年にはパリ大学神学部において博士(magister)の学位を取得、翌年まで正教授として教えることとなる。エックハルトはトマス・アクィナスと同様に生涯2回わたりパリ大学教授を務めているが、この第1回パリ時代に彼が主宰したとされる討論は『前期パリ討論集』と呼ばれる著作に結実している。この時期の作として『聖アウグスティヌス祝日パリ説教』がある。これらは皆ラテン語で書かれているが、後述する『三部作』と呼ばれる彼のラテン語の主著もこの頃執筆され始めたと言われている。

1303年のドミニコ会総会でエルフルトに呼び戻され、47の男子修道院、70以上の女子修道院を擁するというザクセン管区長に任命され、1311年まで管区長として各地で管区会議の主宰、総会出席など多忙な生活を送る中、『集会の書についての説教と講解』をラテン語で著している。

1311年から13年までの間、再度パリ大学に神学教授として派遣される。この第2回パリ時代には『後期パリ討論集』のほかに、『三部作』の実質的執筆に取りかかっていたものと想像される。『三部作』は『命題論集』(*Opus propositionum*)、『問題論集』(*Opus quaestionum*)、『注解集』(*Opus expositionum*)から構成される予定であったが、現存するのはその一部に過ぎず、それ以外のものは失われたのか、構想のみでそもそも存在しなかったのか、真偽のほどは不明である。主として哲学的内容を扱う『命題論集』は序論のみ現存する。『問題論集』ではトマス・アクィナスの『神学大全』のような神学の体系的叙述が展開されるはずであったが現存していない。『注解集』は聖書注解であるが2部から成る。第1部の『説教集』(*Opus sermonum*)は、典礼に用いられる聖書箇所についての説教集であり、部分的に現存する。第2部の『注解』(*Expositiones*)は聖書を構成する諸書についての個別的注解である。創世記、出エジプト記、シラ書、知恵の書、雅歌の一部、ヨハネ福音書についての注解が含まれている。これらはすべてラテン語で記されている。

その後1313年から22年までの間は、ドミニコ会総長代理の資格のもとに、主としてシュトラスブルクおよびその近郊で女子修道院の霊的指導に従事するかたわら、シュトラスブルクのドミニコ会神学院でも教えたものと考えられている。1323年から晩年に至るまでケルンのドミニコ会国際大神学院院長を務めるとともに修道女、民衆を対象とする霊的指導、説教活動を行った。シュトラスブルクおよびケルンにおけるこの時期に多くのドイツ語説教がなされたものと考えられている。これらの説教は修道女たちの前で、あるいは聖堂で公的に行われたものを聴講者が筆記し、エックハルト自身の手によって認可ないし校訂されたと考えられている。また、ハンガリー王アンドレアス3世(Andreas III、在位1290-1301)の王妃アグネス(Agnes、1281-1364)のため、エックハルト自身の手によってドイツ語で記された『神の慰めの書』(*Das buoch der goetlichen troestunge*、1318頃)およびこれに付属する説教『高貴な人間について』(*Von dem edeln Menschen*、1318)がある。

1326年初頭、エックハルトはケルン大司教ハインリヒ2世(Heinrich von Virneburg、在職1306-32)により異端の嫌疑をかけられる。これに対してエックハルトは同年、異端告発に対する『弁明書』を著し、さらに27年当時アヴィニオンにあった教皇庁に上訴している。エックハルト自身は28年1月28日、アヴィニオンでの審問のさなかに亡くなったことが最近の研究で確定されている。詳細は後述するが異端問題に関しては、エックハ

ルト死後の29年3月27日、教皇ヨハネス22世により、エックハルトの説教および著作から引用された28の命題について、異端または異端の疑いがあるとの宣告がなされた。

【3】 ラテン語著作とドイツ語著作

以上、エックハルトの簡単な生活史の中に彼の著作を位置づけてみると直ちに気づく事実は、ラテン語著作は主として彼がパリ大学の教師（講師および教授）として活躍していた時に書かれたものであり、ドイツ語著作は主として修道院長ないし管区長として修道者を指導し、また後述するベギンのような人々、さらにはアグネスのような貴婦人から一般の民衆にいたるまでの多様な人々を対象になされた霊的指導や説教をその内容としていることである。

このことは、「スコラ学者」、つまりは「哲学者」——より正確には「哲学的な神学者」——としての顔と、「神秘主義者」、つまりは「説教者」ないしは「霊的指導者」としての顔という、エックハルトの経歴の中での二面性に対応していると言える。そしてその「二つの顔」はそれぞれ「大学」特にパリ大学と、「修道院」という二つの世界を背景としていると言えることができる。

（一） ラテン語著作——大学におけるスコラ学的言語世界

パリ大学神学部教授の職務は、「講義」(lectio)、「討論」(disputatio)の主宰、「説教」(praedicatio)であった。エックハルトのラテン語著作は「大学」という世界における彼の活動を反映したものである。

「講義」を意味する「lectio」とは、文字通りの意味では「読むこと」である。無論、単にテキストのみを音読するというのではなく、読まれる対象となる書物について解説することが含まれている。現代風に言えば「原典講読」である。そしてその成果は当該原典に対する『注解』という形の著作に結実することになる。『三部作』における『注解集』はこれにあたることになる。

「討論」は、中世の大学の特徴をなす授業の形式であり、『討論集』というスコラ学を象徴する著作に結実している。討論の基礎単位は「項」(articulus)と呼ばれる「問い」であり、そこでは「pであるか？」という形で具体的命題についてその当否が論じられる。対立する双方の論拠が提示された後に、教授が自らの見解を展開し、問題についての諸論拠を整理して裁いてゆくのが常である。その際基本となる方法は矛盾対立の鍵となる概念を分割すること、つまり矛盾対立をもたらす多義的な概念の意味を区分することにより対立する見解の両者を統一的に理解する視点を切り開いてゆくことである。

ヘーゲルなどの近代哲学を経て知られる「弁証法」の概念における「正反合」という図式は、実のところスコラ学における討論の営為を表現したものと言える。ヘーゲル風の近代的「弁証法」を説く人々も「正反合」の運動は無限に続くものと考えているが、これを本来のスコラ的討論の文脈に即して見るならば、哲学的な問題——解明を要する矛盾は無限に存在するゆえに、真理をめざす哲学的探究は無限に続くという事実に対応していると言えよう。

しかし角度を変えて見るならば、討論のスコラ学的方法は概念の一義性に対する飽くこ

となき追求と解することもできる。概念の多義性がもたらす混乱を排除すべく、トマス・アクィナスに代表されるスコラ学の巨匠たちによって積み重ねられたそうした営為の結果は、概念の一義化を志向する膨大な分析の蓄積をもたらすことになる。真理をめざす哲学的探究は無限に続くとは言うものの、こうした蓄積は後からその世界に入る人々の目には、そこにはあたかも一義化され尽くした概念の世界があるかのような印象を与えることであろう。

ラテン語は大学の、つまり中世における知的世界の公用語である。大学という場で展開されたこうしたスコラ学的営為は、そうした一義性の追求の方向にラテン語を彫琢してゆく。大学に身を置き、ラテン語で発言したりものを書いたりする者は否応なしにそうしたスコラ学の蓄積に直面し、その枠内で自らの発言を展開せざるを得ない。先人たちによるスコラ的な概念の蓄積を無視することは許されない。なぜならば、それは「無学」を意味することになるからである。

エックハルトもまた、自らスコラ学者として大学で教え、ラテン語で書物を著すに際しては、そうした言語世界に身を置いていたわけである。彼はいくつかのラテン語説教を残しているが、これも聴衆として大学人を想定している以上、そうしたスコラ学的教養世界を意識したものということになる。

(二) ドイツ語著作——説教と靈的指導の言語世界

他方、ドイツ語は「俗語」である。ただし、この言い方はラテン語による中世の知的世界の統一性を重視する側からの呼称である。ナショナリズムをベースとする近代に高い価値を置く立場からは、ドイツ人にとっての「母国語」という表現が好まれるであろう。

エックハルトのドイツ語著作は大学外部の人々との言語世界の中で書かれたものである。これらのうち「論述」と呼ばれるものは、エルフルトの若いドミニコ会士に向けて書かれた『教導講話』と、王妃アグネスのために書かれた『神の慰めの書』および『高貴な人間について』である。これは「靈的指導」のために書かれた書物である。その他のドイツ語著作は「説教」である。

ここでエックハルトはラテン語著作とはまったく異なる要請のもとに置かれていた。一言で言えば、それは直面する相手の「心を掴む」ことであった。「靈的指導」に際しては相手が直面する問題に的確に対応することが求められた。また、説教に際しても相手を惹き付けることが求められるが、聴衆はラテン語説教とは異なり大学外部の一般民衆であり、その中でも特に注目すべきなのは修道女たちやベギンと呼ばれる女性たちが多かったという事実である。

エックハルトに「異端」の疑いを抱かせることになるのは、主として彼のドイツ語著作の中に見られる大胆な表現であるが、その際私たちが考慮すべきなのはそうした言語世界において、彼は聴衆の心を掴むことが求められていたという事情である。

【4】 二つの言語世界とエックハルト像

異端者として宣告がなされた後、彼は歴史の表舞台からは姿を消した。「彼の著作のいくつかは彼の死後も修道院で密かに書き写され、読まれ、説教に使われることもあったが、

教会の蔵書目録からは抹消された」*²。エックハルトの再発見は約 500 年後の 19 世紀のことである。その際、ドイツ語著作とラテン語著作との「再発見」には時間的なずれがあり、これが研究史におけるエックハルト像の変化につながることになる。

(一) ドイツ語著作のエックハルト——神秘主義者

再発見されたエックハルト像は、まずそのドイツ語の著作を通して知られることとなる。上述のとおり、ドミニコ会修道院を中心にエックハルトの名で知られる写本が伝えられていた。「ドイツではすでに 19 世紀初めに F・フォン・バーダーによってドイツ語説教の写本が収集されており、19 世紀中葉にはプファイファーによって著作集が編まれ」*³ている。当時の研究者たちは「ドイツ文献学の威信がかかっているといわんばかり」*⁴の情熱を傾けてエックハルトの著作の復元に力を注いでいる。19 世紀においてエックハルトを復活させようとした運動はドイツのナショナリズムと無関係ではない。エックハルトはドイツ語を哲学的言語として彫琢した「ドイツ語の父」、さらにはドイツ観念論にまで至る「ドイツ哲学の始祖」として扱われることもあった。

こうしたドイツ語著作をもとにして形成されたのが「神秘主義者」としてのエックハルト像である。こうした「神秘主義者」としてのエックハルト像は、日本では鈴木大拙*⁵から現代の上田閑照*⁶に至るまで、特に禅仏教を背景とする思想家から強い共感的関心を寄せられている。

(二) ラテン語著作のエックハルト——神学者、哲学者

他方、エックハルトのラテン語著作は 1880 年、ドミニコ会士 H・デニフレによって発見される。ここからエックハルトの思想に対する学問的な研究が始まるのであるが、ここでは「ラテン語著作集がエックハルトの主要思想で、ドイツ語著作はせいぜいその不正確な残響に過ぎないとする見解」*⁷が支配的になる。これは「エックハルトの神秘思想をその独自性から考察するのではなく、スコラ学の傍流と見、そこへ還元することでのみ正しく評価できるとする見方」である。ここから、当の発見者であるデニフレ自身、エックハルトのラテン語著作に対する評価は「トマス思想を基盤としながらもそれから逸脱した、概念の混乱した不明瞭な思想」*⁸という低いものであった。しかし、最近では H・フィッシャーのように「神学者」としてのエックハルトをトマス・アキナスの正統的な後継者として高く評価する研究者もいる*⁹。「彼は文学や哲学からのアプローチを斥け、「神秘

*² 香田前掲書、p.4。

*³ 香田前掲書、p.7。

*⁴ 香田前掲書、p.4。

*⁵ 久松真一他編『鈴木大拙全集』岩波書店、1968-71 年、第一三巻。

なお、鈴木大拙のエックハルト理解については蓮沼直應「禅とキリスト教神秘主義」（加藤信朗監修、鶴岡賀雄・桑原直己・田畑邦治編『キリスト教と日本の深層』オリエンツ宗教研究所、2012 年、p.169-188）参照。

*⁶ 上田閑照「神の子の誕生」と「神性への突破」—ドイツ語説教集におけるマイスター・エックハルトの根本思想—（上田閑照編『ドイツ神秘主義研究』、創文社、1982 年、所収 p.107-232）、上田閑照『マイスター・エックハルト』岩波書店、2001 年。

*⁷ 香田前掲書、p.8。

*⁸ 中山善樹『エックハルト研究序説』創文社、1993 年、p.9。

*⁹ Fischer, H., *Meister Eckhart* [ヘリベルト・フィッシャー著、塩路憲一、岡田勝明訳『マイスター・

思想」というネーミングも嫌い、ひたすらトマス神学のコンテキストでエックハルトを理解しようとしている」。さらには、K・フラッシュのように、エックハルトをあくまでも「哲学者」として捉え、「ドイツ神秘主義」なるものは存在しない、とまで極論する研究者^{*10}も現れている。日本でも、田島照久^{*11}や中山善樹^{*12}といった今日のエックハルト研究者たちは基本的にはラテン語著作を主要な研究対象としている。

このように、エックハルト思想についての学問的研究が本格的になると、ラテン語著作を中心に、「神学者」さらには「哲学者」としてのエックハルト像へと比重が移ってきていると言える。しかしながら、そうした新しい角度からの研究者たちもドイツ語の著作が無価値であると考えているわけではない。ラテン語著作とドイツ語著作とを互いに照らし合う関係において捉えることによってこそ、真のエックハルト像が明らかになると見るのがバランスのとれた見方であることは言うまでもなからう。

(三) エックハルト思想の独自性と「異端」疑惑

しかしながら、エックハルト思想の独自性はやはり彼が「異端者」とされるほどの大胆な主張の中に見られる。そうしたエックハルト独自の思想傾向は彼のラテン語著作に見られる「スコラ学者」——「神学者」ないしは「哲学者」——としての側面にも反映しているであろうが、基本的にはドイツ語著作に見られる「神秘主義者」としての側面によるものであり、それは「説教者」ないしは「霊的指導者」としての世界を背景としている。

ここで、注目すべきなのが、エックハルトについての伝記的研究を推し進めたJ・コッホ、さらにはエックハルトの異端審問の経緯を検討した法制史家W・トゥールゼンをはじめとする歴史学者たちが与えてくれるより広い歴史学的な視点である^{*13}。

以下本稿では、「説教者」「霊的指導者」としてのエックハルトが「異端」として告発されたことの歴史的な意味について少しく考察を試みることにしたい。

【5】「異端」告発の社会的背景

我々は、エックハルトが「異端」として告発された事件の意味を理解するためにはその社会史的、政治史的な背景を知らなければならない。エックハルトを告発したケルン大司教ハインリヒ2世は、1306年から1332年までの間ケルン市の宗主権者であった。そうした彼の側から見た場合、厄介な「経済的社会的問題」として立ちはだかっていたのが「托鉢修道会」と「ベギン」である^{*14}。エックハルトは有力な托鉢修道会であるドミニコ会の重鎮であり、またおそらくはベギンと密接な関係にあった。エックハルト告発の背景にはこうした基本的敵対関係の枠組みがあった。

エックハルト：その思索への体系的序論」昭和堂、1992年]。

^{*10} Flasch, K., *Meister Eckhart und "Deutsche Mystik" Zur Kritik eines historiographischen Schemas*. In: *Die Philosophie im 14. und 15. Jahrhundert*, Oraf Pluta (ed.), Amsterdam 1988, pp.439-463.

^{*11} 田島照久『マイスター・エックハルト研究：思惟のトリアーデ構造 esse・creatio・generatio 論』創文社、1996年。

^{*12} 中山前掲書参照。なお、中山はエックハルトのラテン語著作を精力的に訳出している。

^{*13} 香田前掲書、p.14。

^{*14} 香田前掲書、p.289。

（一）托鉢修道会^{*15}

「托鉢修道会」も「ベギン」も中世における都市の発達が生み出したものである。

まず托鉢修道会であるが、中世初期における修道制は「修道会」という人的共同体ではなく、「修道院」という属地主義的な共同体を単位とするものであった。西欧社会における修道院は基本的にヌルシアのベネディクトゥスの『戒律』に従っているが、その特徴は「定住」の原則である。修道士たちは外部世界から隔絶した「禁域」の中で祈りと勉学と労働に明け暮れる生活をすべきものとされていた。「労働」とは具体的には主として農業労働を意味していた。つまり、中世初期のベネディクトゥス型修道パラダイムは基本的には自給自足の農業経済社会に適応したシステムだったわけである。ただし、修道院による土地所有は、修道院の領土化、富裕化、最終的には貴族化につながる可能性を孕んでいた。そのため、修道生活における「清貧」の理想が空洞化する危険を避けるべく、隠修士的な生活を志向する修道者たちの試みが様々な形でなされたが、そうした動きが現実のものとなるのは都市の発達を待たなければならなかった。

ドミニコ会、フランシスコ会に代表される托鉢修道会の出現は、修道制の歴史における一つの革命的な出来事であった。彼らは従来のベネディクトゥス型修道パラダイムにおける「定住の原則」と「土地所有」とを放棄し、経済的には喜捨に頼りつつ、中には大学に進出して学問に従事する会員をも擁しながら基本的には巡回の説教者として生きる、という新しい修道パラダイムを打ち立てた。エックハルトの生涯はそうした新しい修道パラダイムの中で生きる典型的な托鉢修道士の姿を示している。このようなパラダイムが可能となったのは、都市が発達して彼らを支えるだけの「喜捨」をなしうるだけの経済力を持つに至ったからである。托鉢修道会は、属地主義的な農場修道院を単位とするのではなく、人的な共同体を形成して世俗の一般民衆の中に入って活動した。しかしながら、そうした托鉢修道会の活動は、司教およびそのもとに活動する教区聖職者という本質的に属地主義的な教会組織と必然的に摩擦を引き起こすことになる。巡回の説教者という形で登場した新興の聖職者集団は、教区聖職者の既存の権利を脅かす存在だったからである。

（二）ベギン

他方、ベギンもまた都市の発達をもたらしたものであった。「ベギン」とは、正規の修道女のように「誓願」を立てることなく、敬虔な独身生活を送るいわば「半俗修道女」の呼称である。彼女たちは基本的には自分の手で働いて生活し、教区教会とは距離を置き、やがてベギンホフと呼ばれる共同体を形成して生きるようになる。

「特に注目すべきは、女性たちのこの共同体が単発的・局地的現象ではなく、——相互に関連していないにもかかわらず——、ヨーロッパのほとんどの大都市で共時的に生じた大規模な社会現象であり、それゆえ教会のみならず、中世後期の一般市民の精神生活にも改革の機運をもたらした点である。都市の市壁の中で生活空間は共有しつつも、それとは相容れない生活形態を固持し、ラディカルな宗教観を持ち、時として批判的な警句を発する女性たちを、人々はある時は畏敬の念をもって讃美し、ある時は苦々しく無視し、ま

^{*15} ベネディクトゥス型修道パラダイムから托鉢修道会へと向かう西欧修道制の展開については以下の拙著を参照。

拙著『東西修道霊性の歴史—愛に捉えられた人々—』知泉書館、2008年。

たある時は市民生活に対する脅威として迫害した。都市聖職者は彼女たちの扱いに手を焼き、教皇は度々勅書を出して、ある時は彼女たちを弁護し、ある時はその急進性を非難している。女たちの静かな決起はよい意味でも悪い意味でも都市生活者には無視できない現象だったのである」*¹⁶。

このように、13世紀におけるベギンに代表される女性たちの宗教性の高まりは大きな社会問題の様相を帯びていた。こうした現象の原因について、研究者たちはいくつかの角度から説明を与えている。

ベギンに注目した古典的な研究者である教会史家H・グルントマンは、「この運動の根底には、女性の宗教性の高揚があるとし、これにより急増した修道者の数に社会的インフラが対処できなかった」と説明する。これを皮切りに「教会改革や終末論的世界観の盛り上がりによって女性の宗教性が高まったという理解や、12世紀以降女性人口が急増し未婚女性が増えたことに原因を求める説、農業革命の成功により2倍に膨れ上がった人口を抑制するために13世紀以降晩婚化が進み、それによって女性の知的水準が向上したことによって原因を求める説、さらには職業を通して自立することが都市で可能になったため半俗の修道という生き方の選択が可能になったという説など」*¹⁷が提起されている。しかし、香田は特にベギンたちの闘争的な性格に注目した説を紹介する。

上述托鉢修道会というパラダイムは男性のみに可能とされたものであり、女性の修道者には相変わらず「禁域」を厳格に守る「観想修道院」での生活しか許されていなかった。修道院は女性志願者の増大に対応しきれず、入会の条件を厳しくして支度金を支払うだけの十分な資産を持つ者のみを受け入れるようになった。「高貴な家柄と高い教養をもつ女性だけに観想的修道生活が許された結果、行き場を失った敬虔な女性たちは既存の教会組織から距離を置いて、自分たちの修道会を作って共同生活を始める。ここにベギンたちが誕生する。彼女たちは手仕事や施療院での労働によって生計を立てながら、独自に聖務日課を守り、ミサとエウカリスティアを執り行った」*¹⁸。これがドイツの女性研究者デーグラ＝シュペングラーが発表した仮説「上流階級の女性と都市の物質主義に対する「階級闘争」として位置づける」階級的視点からの仮説である。

一旦、一つの信仰生活の形態として成立したベギンの共同体のもとで「社会や教区教会と一定の距離を保つことはベギンたちに批判精神を芽生えさせた。経済的な自立にくわえ、精神的にもある程度自立した意識は、彼女たちの口に墮落した聖職者を非難し、物質欲にまみれた社会に警句を発する勇気を与えた」。その典型が、「学識をひけらかし、聖人ぶって大仰な振る舞いをし、しかし敬虔さに欠ける俗物の男性聖職者を徹底的に批判した」マゲデブルクのベギン、メヒティルト(1208-1282)だという。

しかし、単に教会に対して批判的であるのみならず、「司牧による十分な霊的指導を受けることができない一団は、孤立し閉鎖的信仰集団となることが多く、これが正統教義に従わない異端的な教えの温床となることもあった」*¹⁹。

こうしたベギンたちは、教区聖職者たちにとっては厄介な、手に負えない存在であった。

*¹⁶ 香田前掲書、pp.140-41。

*¹⁷ 香田前掲書、p.141。

*¹⁸ 香田前掲書、p.142。なお香田による「聖餐式」の用語は「エウカリスティア」と改めた。

*¹⁹ 香田前掲書、pp.219-20。

「都市聖職者とベギンたちの葛藤がいかに深刻であったかは、12世紀前半から度々教皇が敬虔な女性を聖職者による不当な迫害と性的誘惑から守るために使者を派遣したり、司教に保護措置を要求したりしていることからわかる」*²⁰。

(三) 「婦女子訓育」——ベギンの保護者としての使命と危険

そのような状況の中、教皇が目にしたのがベギンと同じく都市の勃興が生み出した托鉢修道会であった。ドミニコ会、フランシスコ会は教皇から婦女子訓育 (cura monialium) の使命を与えられる。「婦女子訓育」とは主として女子修道者を指導し、彼女たちを異端から守ることを意味するが、その対象の中にはベギンも含まれていた。ドミニコ会はその指導のもとに正規の修道女の共同体（「第二会」）を擁していたが、ベギンたちの居住区の中で秘跡（ミサ、告解）を授け、基本的には信徒共同体である「第三会」の中に彼女たちを組み込んでいった。

ここで、エックハルトの経歴を想起したい。彼はパリでの勉学および教授活動の時期を除いて、エルフルト、シュトラスブルク、ケルンという都市にあって院長、管区長、総長代理と終始修道会の指導者の職にあった。これは彼がドイツ語著作を著した時期である。それらの職務は直接的にはドミニコ会士を指導する立場であったが、同時に、否それ以上に重要な使命は婦女子訓育の責任者としてのそれであったのである。

しかしながら、こうした立場がいかに危ういものであったのかはこれまでの概観から明らかであろう。まず、中には批判精神を有する者もいた彼女たちを心服させる必要があり、そのためには相当の話術が必要とされたであろう。エックハルトが説教で展開した大胆な表現はそうした要請の中から理解できるように思われる。事実、エックハルトは『三部作への序文』の中で、彼の聖書解釈の意図は、「他のどこかで読んだり聞いたりした心当たりがないような」「旧約新約両聖書の聖典の多くの聖句についての見たこともない解釈 (raras expositiones)」*²¹ をすることである、と述べている。他方、教皇から婦女子訓育の使命を帯びているとはいえ、教区聖職者たちにとっては托鉢修道会であるドミニコ会そのものが煙たい存在である。そしてベギンは教区聖職者たちにとって目の仇のような存在であると共に、時に実際に異端の温床ともなりかねない集団であった。

教区聖職者たちが、「異端」の名目のもとに正統的なベギンをも十把一絡げにして排除しようとしたとしても何ら不思議なことではない。そして実際、まさにエックハルトがシュトラスブルクに在任中の1317年から1319年にかけて、シュトラスブルク司教によるベギンの迫害が起こる。その際、「善きベギンと悪しきベギンとの区別」を求めた教皇令を根拠としてベギンを保護しようとするドミニコ会、フランシスコ会と、一切のベギンを禁止しようとする教区側との間で闘争が展開されるが、結局シュトラスブルクではベギンは全面的に禁止されることになる。

そして問題のケルンは、14世紀前半において何とその人口の6.5%がベギンであったというドイツ最大のベギンの街であった。ケルン大司教がベギンたちをその保護者であるエックハルトもろとも排除しようと考えたとしても、何ら不思議なことではなからう。そ

*²⁰ 香田前掲書、p.144。

*²¹ n.2, LWI, p.148, 12f.

して、説教者としてのエックハルト、つまりはドイツ語で著作を著した「神秘主義者」エックハルトは事実大胆な表現を用いており、「異端」として訴える口実となるような材料には事欠かなかったわけである。

【6】「異端」命題と説教者の言語世界

(一) 「異端」宣告

告発は、異端が疑われた命題の二つのリスト(49 および 59 命題)をもってなされた。当然のことながら、そのほとんど(108 命題中 96 命題)はドイツ語著作からの引用であった。後にラテン語著作『ヨハネ福音書注解』からの命題が付け加えられ、嫌疑をかけられた命題は全部でおよそ 150 に上った。しかしながら、アヴィニョンの教皇庁神学委員会の判定により、これらの命題のうちから 28 命題のみが取り上げられ、検討された。

1329 年 3 月 27 日、教皇ヨハネス 22 世による大勅『主の耕地にて *In agro dominico*』*²²においてその結論が示され、エックハルトは最終的に異端者とされるのであるが、その内容はもう少し詳しく見る必要がある。

エックハルトの諸命題を検討した神学者たちの結論は、28 命題のうち、第 1 から第 15 までの命題および、エックハルトが自身のものであることを否認した 2 つの追加命題については「言葉遣いと、思想の文脈の点で誤謬と異端の悪を含んでいる」とし、他の 11 の命題については「大きな誤解を与えかねない、大変軽率で、異端のそしりを受けかねないものであるが、しかし、訂正と修復をかなり加えれば、正統の体裁を成すかもしれないもの」というものであった。告発者が挙げた 150 もの命題の中から、エックハルト自身が自らのものと認めた命題で異端とされたのは 10%にあたる 15 命題であった。

そもそも異端の審査は神学者たちによってなされる。つまり、スコラ学の言語世界と説教・霊的指導の言語世界とが出会い、基本的には前者の中で成立している正統性の基準にしたがって後者を審査するわけである。事実、エックハルトの命題は審査にあたってはドイツ語からラテン語に翻訳されている。注目すべきなのは、11 の命題について「訂正と修復をかなり加えれば、正統の体裁を成すかもしれない」とされている点である。つまり、これら 11 の命題については、好意的な解釈によってスコラ的言語世界における正統性の基準と架橋可能とされていることになる。残る 15 命題についてアヴィニョンの神学者たちは正統性の基準と架橋不可能と見て「異端」と判断したわけである。

(二) 「異端」命題

以下に、やや冗長ではあるが、エックハルト自身が自らのものと認めた 15 の「異端」命題を引用しておきたい*²³。これは、アヴィニョンの神学者たちが当時彼らが共有していた主としてスコラ学的言語世界における正統性の基準との間に架橋不可能とみなした「神秘主義者」エックハルトの思想を示すものだからである。

第 1 命題：「なぜ神はもっと前に世界を創ることができなかったのか」と問われたことが

*²² D.S., 950-80

*²³ 訳文は香田前掲書、p.312-315 によるが、キリスト教用語について一部改変を施す。〔「聖餐式」→「エウカリスティア」、〔懺悔」→「悔悛)〕

あり、そのとき、次のように答えた。「神はもっと前に世界を創ることはできなかった。というのは、事物は存在しないうちは、働くことができないからである。神は存在するや否や、世界を創造したのである」と。

第2命題：同様に。世界が永遠から存在していたことを認めることはできる。

第3命題：同様に。神は存在するや否や、自分と同じく永遠の御子を完全に自分と同じ神として産み、同時に世界を創造した。

第4命題：同様に。どんな行いの中でも、それどころか悪行の中でも、それが、罰の悪であれ、罪の悪であれ、神の栄光は等しく顕われ、輝く。

第5命題：同様に。誰かを呪う者は、呪うことによって、つまり、呪いの罪によって神を讃えているのであり、よりひどく呪い、より大きな罪を犯すほどに、より多く神を讃えているのである。

第6命題：同様に。神を冒瀆する者は、神を讃える。

第7命題：同様に。あれこれのことを望む者は、悪を悪いやり方で望んでいる。なぜなら、彼は善の否定と神の否定を望み、神が自らを拒むのを祈っているからである。

第8命題：栄誉も利益も信心も神聖さも褒美も天国も、何物も求めないで、彼のもっているすべてを諦め切る人間たちに神は祝福を与える。

第9命題：先日、私は神から何かを受け取ろうとか何かを欲しがっただろうかと考えてみた。特にこのことをよく考察してみたい。というのは、私が神から何かを受け取っているとすれば、私は下僕か奴隷のように彼の下に従属していることになってしまうし、神も与えることで主人になってしまう。永遠の命の中ではこのようであってはならない。

第10命題：私たちは神の中に完全に形を移し、彼に姿を変えてしまう。エウカリスティアでパンがキリストの体になるのとまったく同じように、私も彼の姿に変わる。キリストが私を、自分に似た存在ではなく、自分と同一の存在にする。生きる神においては、真理には差がないからである。

第11命題：父なる神が人間の本性をまとった独り子に与えたものは何であれ、すべて私にも与えた。一性も、神性も何も欠けることなく、すべてを彼にも私にも与えたのである。

第12命題：聖書がキリストについて語っていることはすべて、善き神的人間によって実現される。

第13命題：神の本性に固有なものはすべて、義しき神的人にも固有なのである。それゆえ、そのような人は、神が行うすべてのことを行う。彼は神と一緒に天と地を創造したし、永遠の御言葉「イエス・キリスト」の産みの親である。神はその人なしでは何もすることができないのである。

第14命題：善き人は、神が望むことは何でも望むという具合に、自分の意志と神の意志を合体させなければならない。神が、私が罪を犯したのをよしとしたなら、私も罪を犯さなければよかったとは思わない。これこそ本当の悔悛である。

第15命題：もし人が数え切れないほどの死の大罪を犯したとしても、その人が正しい心の持ち主ならば、それをしなければよかったとは思わないものだ。

【7】 説教の言語——「異端」命題本来の文脈

以上 15 命題のうち、第 1～3 命題は神の世界創造に関する宇宙論的な問題である。また第 9～13 命題は有名な神と人間との同等・同一性というエックハルトの中心思想にかかわるものである。これらの問題について本格的に論じることは本稿の範囲を超える。以下に「説教」および「霊的指導」との文脈が比較的明らかな第 4～6 命題および第 7・8・14・15 命題の意味について簡単にコメントすることとしたい。

(一) 第 4～6 命題——「本願ばかり」

これらの命題の出典はラテン語著作『ヨハネ福音書注解』第 9 章第 49 節である。香田は「異端の疑いのある命題を審査する際、審問官たちがエックハルトの著作に立ち戻って出典箇所を吟味せず、引用された箇所のみ可否を論じたであろうことは研究者が一致して認めるところである」と指摘し、「文脈から切り離された大胆な表現が、それゆえ流神的に響き、断罪されることはたびたびあったが、この三つの命題にもこれが当てはまる」として、ヨハネ福音書注釈の文脈に遡ってエックハルトを弁護している^{*24}。

しかし、これらの諸命題はむしろ初期の『教導講話』の思想を反映していると見ることができよう。

香田も第 11 講話の「真実、私たちが自分自身のものをもてばもつほど、神をますますもたなくなる。もし、自分のものを放棄したとすれば、その人はいかなる行いにおいても神を決して見失うことはない。また、その人が、過ちをおかしたり、言い損ないをしたり、あるいは不当な痛手を被ったとしても、神がその行ないの始まりなのだから、神が当然その被害も御自身に負わねばならない……中略……真に、正しい心の人や、神をよく心得た人には、一切の苦しみや、突然の出来事も大いなる益になる。なぜなら、聖パウロ（ロマ 8・28）や聖アウグスティヌスが「罪悪ですら」と述べたように、よい人には、万事が益になる」^{*25} というテキストに言及する。このテキストが説いているのは、自己の意志を完全に放棄した人間は「正しい人」「神をよく心得た人」であって、そうした人には罪悪すらも益になる、という思想である。

しかし、第 4～6 命題の大胆な主張を理解するための背景としてそれ以上に助けとなるのは同じ『教導講話』の第 12 講話および第 13 講話であろう。

第 12 講話冒頭でエックハルトは「本当に、罪を犯したということは、それにより苦しみ悔むかぎり、罪ではない」^{*26} と言い切っている。そしてキリストを裏切った使徒たちの事例に訴える。「神は、あなたのすべての罪から受けた被害、不名誉の一切を喜んで耐えようとし、また、長い間耐え抜こうとする。これは、人が罪を犯してから神の愛を深く認識させるためであり、また罪を犯した後に当然、しばしばあるように、その人の愛と感謝をますます大きくさせ、その熱心さをますます燃え上がらせるためである。このゆえに、神は罪の害をすすんで堪え忍び、しばしば堪え忍んできたし、予め選んだ人々に大いなる行

^{*24} 香田前掲書、上 p.324-325。

^{*25} 植田兼義訳『キリスト教神秘主義著作集 6 エックハルト I』教文館、1989 年、p.296。

^{*26} *ibid.*

ないをさせようとして、もっともしばしば彼らのうえに〔害を〕与えた。さあ、考えてごらん、あの使徒たちほど私たちの主に愛され、親しくされたものはいただろうか。彼らのなかで大罪に陥らなかったものはいない。みな大罪を犯した罪人だった。私たちの主は、旧約、新約聖書のなかで彼らが後になってもっとも愛する人になったことを証言している。今日、初めに過失を犯さないで、大事を成し遂げたという例はほとんど聞いたことがない」*²⁷。

また第13講話では「神的な悔い改め」が示す特徴の理由として「なぜなら、人は自分の弱さを知れば知るほど、また、過ちを多く犯せば犯すほど、ますます、自分を、いかなる罪も、欠陥もないまったき愛をもって神に結び付ける根拠が増大するからである」*²⁸と述べている。

この第13講話の言葉のうちに、親鸞のいわゆる「悪人正機説」との類似を見て取るとは容易であろう。第4～6「異端」命題も、これらの講話の文脈を背景として見るならば抵抗のないものとして理解できよう。しかしながら、第4～6命題が一人歩きするならば、ちょうど「悪人正機説」が「本願ほこり」の弊害を招いたのと同じような反道徳の言説となることは言うまでもない。ちなみに、第12講話冒頭の一節の続きには「人は、時間、永遠のなかに起きるいかなるものにも、〔永遠の死をもたらす〕大罪であれ、小罪であれ、なんであれ、どんな罪をも犯そうとしてはならない」*²⁹と述べられている。

要するに、第4～6「命題」は独立した「命題」として扱うべきではなく、自己の意志の放棄、否むしろ神によって打ち砕かれた心を前提として理解すべきなのである。

(二) 第7・8・14・15命題——「自己の意志の放棄」

第7・8命題はまさにその「自己の意志の放棄」にもとづく祈りの純粹性を要求したものであるとして読める。これらの命題について香田は「この命題それ自体は正統的で、異端ではあり得ない。アヴィニヨンの神学者たちを危惧させたのは、むしろ、この命題の背後にあるラディカリズム、つまり、神から見返りを期待する祈りはすべて悪であるという提唱が一般の信仰者に与える影響の強さであろう。『神の慰めの書』でエックハルトは神を愛することに関連して、「神の子として神から生まれた者は神を神自身のために愛するのであり、そのことは取りも直さず、その人が神を愛するために神を愛し、行為するために自らのすべての行いを為すということなのである」と述べ、純粹な愛には「なぜ」がないとする。祈りを神への純粹な愛においてのみ捉えよという主張はさらに、「しかし、神のためにさえ祈ってはならない」と極言され、徹底される。祈りを現世的なものから切り離し、純化していく主張は究極的にこのようなラディカリズムへと向かい、最悪の場合は無神論に繋がることを、神学者たちは危惧したに違いない。異端の根拠は、「なぜなら〔この命題は〕『主の祈り』を貶めており、…さらにすべての教会と、祈りつつ求めた聖者たちを貶めているからである」とされているが、特にこの命題が「主の祈り」への冒瀆であるという判断には、司牧として靈性教化に携わる者の司牧的視点が反映している」*³⁰とコメントしている。

香田のこのコメントはおそらく公平なものであろう。アヴィニヨンの神学者たちは、こ

*²⁷ 植田訳、p.297。

*²⁸ 植田訳、p.298。

*²⁹ 植田訳、p.296。

*³⁰ 香田前掲書、pp.326-7。

ここではスコラ学的言語世界に閉じこもるのではなく、彼らなりの説教・靈的指導の言語世界から判断していることを示唆している。しかし、まさにそこに神学者たちが想定する司牧の対象とエックハルトが直面した人々との意識レベルの差があったのではないかと思われる。おそらく、エックハルトが直面した人々はこうしたラディカリズムがあればこそ心を掴むことができるような人々だったのではなかろうか。

ただし、我々自身にとってエックハルトが実際に危険なラディカリストであるのかを検討するための手掛かりは、再び『教導講話』に見出すことができよう。それは先と同じ第12講話の長い引用箇所である。ここでエックハルトは「自己の意志を放棄せよ」と要求しているというよりは、使徒たちの例も挙げながら、神が人間を打ち砕き、自己の意志を放棄させてくださる、と述べているように思われる。

そして注目すべきことに第12講話の中程では、「真に、もし、人が神の意志のうちに移されたなら、自分が前に犯した罪が起こらなかつたらよかったと思うことはなかろう」⁴と記されている。これはほとんど第14・15命題そのものである。その続きには「もちろん、この罪が神に向けられたのではなく、あなたはこの罪によりいっそう大きな愛に結ばれ、これにより低められ、辱められるからである。したがって、〔罪人は〕神に背いて行動したわけではないからである。しかし、神はそこからあなたの最善のものを引き出そうと思わなかつたら、あなたにそのようなことを与えなかつたら、この点は神を十分に信頼しなさい」⁵とある。こうした文脈の中に置くならば、これらの命題はけっしてラディカルな「要求」ではない。

【8】 結語

エックハルトのドイツ語著作、ラテン語著作は、それぞれ説教・靈的指導の言語世界、スコラ学的言語世界を背景とするものであり、そのいずれに力点を置いて見るかに応じて、エックハルトも「神秘主義者」としての顔と「神学者」「哲学者」としての顔とを示す。しかし、エックハルト思想の独自性はやはり説教・靈的指導の言語世界に根ざすものであり、その対象となるのは、都市の勃興という社会的背景の中、ベギンを中心とする新たな宗教性を求める人々であった。エックハルトの「神秘思想」はそのような人々の求めに応じて形成されたものと言えよう。そのような彼の立場は旧来の属地主義的な教区聖職者たちとの対立にさらされ、結局彼は異端の烙印を押されてしまう。しかし、「異端」とされた命題は本来の説教・靈的指導の言語世界の中に置かれてこそ、その真意が理解できるものであろう。本稿は、そうした理解に向けての小さな一歩を目指すものである。

*³¹ 植田訳、p.296-7。

*³² 植田訳、p.297。

"Mysticism" of Eckhart -The Language of Sermon and Spiritual Guidance-

Naoki KUWABARA

The background of German writings of Eckhart is the world of the sermon and the spiritual guidance. The back ground of the Latin writing of Eckhart is the world of the scholasticism. Eckhart shows a face as a “mystic” if one makes much of German writing of Eckhart. Eckhart shows a face as a “theologian” or a “philosopher” if one makes much of Latin writing of Eckhart.

In this article, I’ve examined the significance of the two worlds, i.e. the world of the scholasticism and the world of sermon and spiritual guidance that are the backgrounds of these two writing group.

After all, the world of the sermon and the spiritual guidance was the root of the originality of the thought of Eckhart. The object of the spiritual guidance and the sermon of Eckhart were the people who seek new type of religious devotion, especially Beguines. They appeared in a social background of the rise of medieval cities. It may be said that “the mystic thought” of Eckhart was formed form the demand of such people.

There was a struggle between parish clergymen who ware based on the territorial principle and friary orders as personal community. They competed for the spiritual authority over Beguines. Eckhart who was an influential Dominican was involved in this struggle. He is exposed to the opposition from the parish clergymen, and after all he was sentenced as a heretical.

However, the real intention of the propositions that are said to “be heretical” should be understood in the original context of the sermons and the spiritual guidance.